

実務経験を経て変化した私の検査技師像

◎八幡 紗矢¹⁾

長崎大学病院 ゲノム診療センター¹⁾

今回、若手臨床検査技師の立場から学生フォーラムにて発表する機会をいただいた。私は昨年の春に長崎県の九州医学技術専門学校を卒業し、同年に長崎大学病院ゲノム診療センターへ就職した。当院はがんゲノム医療拠点病院に指定されており、私は遺伝子検査に用いる病理検体の作製を主な業務としている。がんゲノム医療とは、がん組織の遺伝子変化を調べ、その結果を基に個々の患者さんに最適な治療法を選択する医療のことである。私は臨床や病理の先生方とコミュニケーションを取りながら検体の選択や依頼調整を行うなど、多職種と協力しながら日々取り組んでいる。さらに先月には、当院での遺伝子検査の結果データを基にセミナーで講師を務める機会をいただき、貴重な経験を得ることができた。私は2年前の学生フォーラムで「将来の臨床検査技師像」をテーマに発表し、当時は研究にも携われる検査技師を理想像として描いていた。学生時代の私は、検査技師を検査室や研究室の中で専門的な業務に従事する存在として強くイメージしていた。しかし実際にがんゲノム医療という分野に携わり、検査技師は検査部だけにとどまらず医局や診療現場と密接に関わり、診療方針の決定やチーム医療の一員として重要な役割を果たしていることを実感している。さらに、検査を通じて得られる情報が患者さん一人ひとりの治療に役立てられていることに、責任の重さを実感するとともにやりがいを感じるようになった。臨床検査技師としてまだまだ未熟ではあるが、現在の領域に限らず幅広い分野で経験と知識を積み重ね、将来的には自身の体験を基に後輩の育成や検査技師を志す学生のサポートに携わりたいと考えるようになった。また、学生時代には長崎大学病院で臨地実習でお世話になった。教科書だけでは理解が難しかった検査や検査機器も実際に目にすることで理解が深まり、現場で働く技師の方々の姿を通して将来像を具体的に描くことができた。臨床検査技師として働き始めてから実習生と関わる機会はまだないが、将来を迎える立場となった際には、自らの実習経験を活かして学生に意味のある学びを提供できるよう努めたいと考えている。